

https://farid.ps/articles/israel_assassination_of_walter_guinness_moyne/ja.html

ウォルター・ギネス、第1代モイン男爵暗殺： パレスチナ紛争の転換点

1944年11月6日、カイロの通りは中東全域とその先まで響き渡る衝撃的な政治的暴力の舞台となった。ウォルター・エドワード・ギネス、第1代モイン男爵、中東駐在英国大臣は、ユダヤ過激派組織レビ（シュテルン・ギャングとも呼ばれる）の2人のメンバーに暗殺された。この大胆な行為は、著名な英国政治家の命を奪っただけでなく、ユダヤ国家への潜在的な道筋を阻み、パレスチナすでに不安定な紛争を激化させた。モイン卿暗殺は、英國植民地政策、シオニスト過激主義、パレスチナ支配をめぐる闘争の歴史における決定的瞬間として残っている。

人物：ウォルター・ギネス、第1代モイン男爵

ウォルター・エドワード・ギネス、第1代モイン男爵（1880–1944）は、著名な英国政治家、実業家、軍人であり、アングロ・アイルランドのギネス醸造家の一員だった。1880年3月29日、アイルランドのダブリンで生まれ、エドワード・ギネス、第1代アイヴェー伯爵の三男で、裕福で影響力のあるギネス王朝の相続人だった。イートン校で教育を受け、名門「ポップ」協会の会長やボート隊長としてリーダーシップを発揮した。1903年、ブキャン第14代伯爵の娘レディ・イヴリン・ヒルダ・ステュアート・アースキンと結婚。夫妻には3人の子が生まれ、後継者のブライアン・ギネス、第2代モイン男爵は後に詩人・小説家となった。

モインの特権的な育ちは義務感を弱めることはなかった。同時代人は彼を知的で、几帳面で、公衆に献身的と描写し、生涯を軍事・政治奉仕に捧げた。家族の莫大な財産——約300万ポンドと推定——は影響力と独立を与え、農業、住宅、植民地政策における改革派の利益追求に活用した。

軍歴

ギネスの軍歴は第二次ボーア戦争（1899–1902）で始まり、帝国ヨーマンリーに志願し、戦闘で負傷し、女王南アフリカメダルを受賞した。第一次世界大戦ではエジプト、ガリポリ、フランスで戦い、中佐に昇進した。勇猛さで2度殊勲十字章（DSOにバー付き）を受章し、中東との生涯の絆を築いた。1987年に出版された彼の戦時日記は、人間性と歴史への鋭い感覚を持つ思慮深い兵士を示す——帝国を義務と負担の両方と見なした人物だ。

政治経歴

前線からの帰還後、ギネスは保守派政治家として公的生活に入った。ロンドン郡評議会（1907–1910）で務め、1907年から1931年までベリー・セント・エドマンズ選出の下院議員だった。約30年にわたる経歴で複数の影響力ある役職を歴任：陸軍次官（1922–1923）、財務省

財務秘書官（1923–1925）、農業・漁業大臣（1925–1929）、そこで砂糖大根栽培と地方近代化を推進した。

1932年にモイン男爵として貴族に叙せられ、上院で奉仕を続けた。1933年のスラム清掃委員会、1934年のダラム大学王立委員会、1938年の西インド王立委員会など大規模な公的調査に貢献した。第二次世界大戦でモインは再び政府入りし、農業省共同議会秘書官（1940–1941）、植民地大臣兼上院院内総務（1941–1942）、最終的に中東駐在大臣（1942–1944）となった。この役職でリビアからイランまでの領土の英國戦略を監督し、ウィンストン・チャーチルの中東最高代表だった。

事業とその他の関心

ギネス醸造会社の取締役として、モインは家族事業の世界展開に役割を果たした。バンクーバーでブリティッシュ・パシフィック・プロパティーズを共同設立し、1939年に開通したライオンズ・ゲート橋の建設を委託した。慈善家としてロンドンとダブリンで労働者家族の生活条件改善のための住宅信託を資金援助した。

モインの好奇心と冒険心は政治と事業を超えた。熱心なヨット所有者・探検家で、数隻の改装ヨット——アルファ、ルサルカ、ロザウラ——を所有し、太平洋とインド洋を横断する探検を行った。1935年に英國初の生きたコモドドラゴンを持ち帰り、動物学・民族学コレクションは後に博物館に寄贈された。『ウォークアバウト：太平洋とインド洋の間の旅』（1936年）と『アトランティック・サークル』（1938年）を著し、人類学と異文化理解への関心を示した。

歴史的文脈：中東とパレスチナ危機

ウォルター・ギネス、第1代モイン男爵暗殺は、第二次世界大戦中の英國パレスチナ委任統治下で高まる緊張の中で起きた。1942年以降の中東駐在大臣として、モインは英國帝国と石油供給に決定的な地域での戦争戦略監督を担った。これには1939年白書——ユダヤ人パレスチナ移民を月1500人に厳しく制限——の施行が含まれた。

計画と実行犯

英國中東駐在大臣暗殺のアイデアは、レビ創設者アブラハム「ヤイル」シュテルンに由来し、英國帝国システムへの象徴的打撃と見なした。1942年のシュテルン死後、計画は新レビ指導部——後のイスラエル首相イツハク・シャミルを含む——の下で復活した。2人の若いパレスチナ・ユダヤ人、エリヤフ・ハキム（19歳）とエリヤフ・ベト・ズリ（22歳）が任務に選ばれた。彼らは献身だけでなく、パレスチナ外での攻撃でユダヤ問題に国際的注目を集められる能力——レビ初の国外作戦——で選ばれた。レビは意図的にモインを標的にし、アイルランド系高位英國貴族の死が帝国全体に響くようにした。計画では、暗殺がユダヤ苦難を劇化し、英國権威に挑戦し、シオニスト闘争をグローバル反植民地キャンペーンとして描く可能性を強調した。

暗殺：綿密に計画された攻撃

1944年11月6日午後早々、ハキムとベト・ズリはカイロのゲジーラ島にあるモイン邸近くで待機した。午後1時10分頃、モインの車が到着、運転手ランス・コーポラル・アーサー・フラー、秘書ドロシー・オズモンド、副官アンドリュー・ヒューズ=オンスロー少佐を乗せていた。暗殺者は自転車で接近した。ベト・ズリがフラー胸を撃ち即死させた。ハキムが車ドアを開け、モインに3発撃った：1発が鎖骨上頸部、1発が腹部——大腸を貫通し脊椎近くに止まった——、3発目が指と胸をかすめた。モインは英國軍病院に急送されたが同日中に64歳で死亡した。実行犯は逃亡したがエジプト警察に追われ、短い銃撃戦後捕獲され、怒った群衆にリンチされかけたが逮捕された。法医学分析で彼らの武器は以前のレビ対英國当局作戦と結びついた。

即時の帰結

暗殺は世界を震撼させ、ヘッドラインを飾った。英國当局は騒乱を恐れユダヤ人コミュニティへの大規模報復を避けたが、中東全域で警備を強化した。エジプトではレビ宣伝に反し即時レビ支持デモはなく、1年後の1945年11月にカイロとアレクサンドリアで反ユダヤ暴動が発生、数人の死者と大規模財産損害を生んだ。英國情報機関は模倣攻撃を警告——1945年2月のエジプト首相アフマド・マーヘル暗殺で現実化した。事件に影響を受けたのは若いエジプト将校ガマール・アブドゥル・ナセルで、暗殺者の勇気と反植民地決意を称賛したとされる。

裁判と処刑

ハキムとベト・ズリは1945年1月にエジプト軍事裁判で起訴された。手続きを利用し、国家解放のためのグローバル闘争の一部として行動を弁護する激しい演説を行った。エジプト革命史文献を求め、インド・アイルランドの反帝国運動と比較した。ユダヤ人コミュニティ、国際知識人、ジョン・ブラウンやアイルランド共和主義者と比較したインド人ガンジー派からも広範な慈悲嘆願があったが、有罪判決で死刑となった。上告は棄却され、両者は1945年3月22日に絞首された。英國当局（マイレス・ランプソン大使を含む）はさらなる攻撃を奨励する寛容の兆候を恐れ、迅速処刑を主張した。

ウィンストン・チャーチルの反応

ウォルター・ギネスはウィンストン・チャーチルの最も親しい個人的友人・政治同盟者だった。2人は「ジ・アザー・クラブ」を共同設立し、1934年のヨット旅行など休暇を共有した。チャーチルはモインの死に打ちのめされ、「恩知らずの忌まわしい行為」と呼んだ。1944年11月17日の議会演説で「暗殺者の銃煙」が政策を決定してはならないと警告した。パレスチナ分割議論予定の閣議をキャンセルし、シオニスト指導者に著しく冷淡になり、ワイズマンの個人的メッセージに返信しなかった。公開された書簡は暗殺者への慈悲なしを主張するチャーチルの姿勢を示し、悲嘆と政治的計算の両方を反映した。チャーチルはシオニズムへの広範な同情を放棄しなかったが、暗殺は彼の見方を永遠に変えた。個人的友情を政治的断絶に変え、中東での英國立場の人道的・戦略的コストを強調した。

長期影響と広範な含意

モイン卿暗殺は即時を超える帰結を生んだ。英國とシオニスト運動間の不信を深め、短期分割提案を阻み、英國の委任統治放棄最終決定に寄与した。以降の暴力エスカレーションは1947年国連分割投票と1948年イスラエル建国に至った。イスラエルでは世界的にテロリストと非難された暗殺者が国家解放の殉教者として再解釈された。1975年、遺骨はエジプトからの囚人交換で帰還し、エルサレムのヘルツル山で完全軍事葬儀で再埋葬された。

持続する影：英イスラエル関係と王室つながり

モイン卿暗殺の遺産は1940年代をはるかに超え、英イスラエル関係に微妙だが持続的な影を落とした。最も持続的な象徴の1つは、エリザベス2世女王の70年統治中のイスラエル不在だった。120カ国以上訪問とイスラエル指導者の複数招待にもかかわらず、公式国賓訪問は行わなかった。

英國政府はアラブ同盟を怒らせらず地域貿易関係を危険にさらさないよう王室イスラエル訪問を抑える非公式政策を維持したが、個人的・歴史的要因も役割を果たした。委任統治中のシオニスト過激派による英國要員攻撃の記憶——特に1944年モイン卿暗殺、チャーチルの親友——は王室と英國機構に持続的印象を残した。モイン暗殺は1946年キング・デービッド・ホテル爆破（91人死亡、英國当局・民間人含む）を含む広範な暴力キャンペーン部分で、多くの英國権力圏で裏切りと喪失の時代を象徴した。

一部報告はこれらの記憶が女王の私的認識を形成したと示唆する。1つの記述は彼女が「すべてのイスラエル人はテロリストかテロリストの子」と信じたと主張——パレスチナでの帝国の暴力的終わりを目撃した英國エリート世代がこうした出来事をどれほど内面化したかを反映する。その結果、イスラエル当局はバッキンガム宮殿での単独謁見をほとんど与えられず、接触は多国間または儀礼イベントに限定された。モイン卿暗殺の影は現代外交プロトコルに及び、帝国のトラウマが数十年にわたり微妙だが強力に持続する方法を示した。

結論

ウォルター・ギネス、第1代モイン男爵暗殺は英國当局者の殺害以上だった——パレスチナ紛争の軌道を再形成し、英國中東帝国の崩壊を加速した地震的出来事だった。モイン、軍人、政治家、改革者は競合するナショナリズムの間でバランスを求める消滅しつつある帝国実用主義者の種を代表した。彼の死は潜在的調停者を沈黙させ、全ての側の態度を硬化させた。

現代国際規範のレンズで見ると、外国高官の外国土上殺害はテロ行為として明確に分類される。現代定義——国連や大多数の国家政府が用いる——は政策影響のための非戦闘員当局者への意図的暴力行為をテロと特定、動機や原因を問わず。レビが行動を反植民地抵抗として枠組みしたが、国外民間政治指導者の標的殺害は現在のテロ概念に完全に該当し、革命的暴力と道徳的正当性の持続的緊張を強調する。

参考文献

- Barnett, Correlli. **The Collapse of British Power**. London: Methuen, 1972.

- Ben-Yehuda, Nachman. **Political Assassinations by Jews: A Rhetorical Device for Justice**. Albany: State University of New York Press, 1993.
- Churchill, Winston S. **The Second World War: Volume VI – Triumph and Tragedy**. London: Cassell, 1954.
- Cohen, Michael J. **Churchill and the Jews**. London: Frank Cass, 1985.
- Gilbert, Martin. **Winston S. Churchill: The Prophet of Truth (1922–1939)**. Boston: Houghton Mifflin, 1977.
- Hoffman, Bruce. **Anonymous Soldiers: The Struggle for Israel, 1917–1947**. New York: Knopf, 2015.
- Louis, Wm. Roger. **The British Empire in the Middle East, 1945–1951**. Oxford: Clarendon Press, 1984.
- Porath, Yehuda. **The Emergence of the Palestinian-Arab National Movement, 1918–1929**. London: Frank Cass, 1974.
- Shindler, Colin. **A History of Modern Israel**. Cambridge: Cambridge University Press, 2008.
- Wasserstein, Bernard. **The British in Palestine: The Mandatory Government and the Arab-Jewish Conflict, 1917–1929**. Oxford: Basil Blackwell, 1978.
- Wasserstein, Bernard. **Herbert Samuel: A Political Life**. Oxford: Clarendon Press, 1992.
- Weizmann, Chaim. **Trial and Error: The Autobiography of Chaim Weizmann**. New York: Harper & Brothers, 1949.
- Wistrich, Robert S. **Zionism and Its Discontents: Essays on the Jewish Struggle for Statehood**. New York: Oxford University Press, 2017.
- **The Times** (London). “The Murder of Lord Moyne.” Editorial, November 8, 1944.
- **Ha’aretz**. “The Death of Lord Moyne: Consequences for Zionism.” November 1944.
- **Hansard Parliamentary Debates**. House of Commons, 17 November 1944, vol. 404.
- **Royal Archives**. Correspondence Relating to Middle East Policy and the Assassination of Lord Moyne, 1944–1945. Windsor Castle: Royal Archives Collection.
- Segev, Tom. **One Palestine, Complete: Jews and Arabs under the British Mandate**. New York: Metropolitan Books, 2000.
- Smith, Charles D. **Palestine and the Arab-Israeli Conflict: A History with Documents**. 9th ed. Boston: Bedford/St. Martin’s, 2021.